NHK ART

掲載記事：電波タイムズ　2014.12.15号

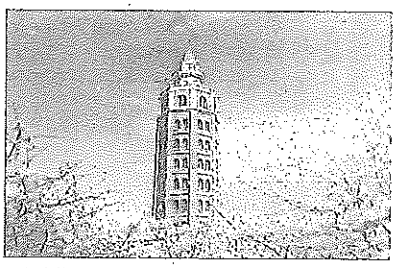
1914 幻の東京 よみがえるモダン都市

(終) 撮影からVFXまで

全編4K制作に挑戦

「テレビの技術」が進化する意味づけが必要

風景を撮るだけでは人々の認識は拡大しない



明治期から大正末期まで東京・浅草にあった12階建ての塔「凌雲閣」も番組では見事に表現された（©NHK）

NHK／NHKアート

NHKは今年の1月1日に総合テレビで放送した「1914・幻の東京～よみがえるモダン都市～」（放送時はハイビジョン）は、撮影とVFXの制作をすべて4Kで行うという前例のない番組制作を行った。この番組はNHKオンデマンドにおいても10月下旬から2K版が配信されており、視聴数も順調に伸びているという。この画期的な取り組みに携わったNHK大型企画開発センターのシニア・ディレクター貴志謙介氏、撮影機材の選択や素材の管理・現像を担当したカードバンク・コミュニケーションの小島英雄氏、VFX制作を担当したNHKアートのデジタルデザイン部CG・VFX担当部長林伸彦氏に話を聞いた。

（最終回／全4回連載）

最後にお三方に4Kの未来そして、今回の実験番組の制作に携わることによって、何が得られたかを聞いてみた。

小島氏は「この番組の撮影を終えて1年が経過しましたが、正直に言うと今頃4Kについては、もう少し進んでいるかと思っていました。現実では4Kテレビが発売されていますが、撮影側に立ってみると、貴志さんみたいに冒険的に4K番組をもっと制作してほしいです。CMでも4Kで撮影しているといっても実は一部の合成部分などで4Kを使っているだけで、丸々4Kを使って制作するという過程がこの1年でもっと進行するかと思っていたらそうでもなかったのです。このような状況で東京オリンピックに向かって、4K・8Kの放送が間に合うのか心配です。それは単に予算だけの話ではないようにも感じています。そういうものにチャレンジする気概のようなものがもっと必要なのではと感じました。もう少し誰かグイグイ引っ張るような旗振り役が出てこない限りは、4K制作が育たないのではと思いました」。

林氏は「私は、この制作をしているときに、昔に大変なのが実感でき、今回は非常に勉強になりました。データの取り回しや合成のための時間なども解像度は6倍になるから大変だと言われていたのですが、その当時は時間をかけて乗り切ったのです。ただ今回は、HDということが分かりました。今回はスケジュールもタイトだったので、いくつかは作りましたが、3DCGの要素を減らしています。もっとたくさんの力メラアングルを作りたかったという思いはあります。おそらく、このような番組がもっとたくさん作れるようになったら、そういったことが普通に出来る状況に多分なっていくはずです。そのための最初のステップとして、この番組はすごく意味があって、この次にこういう企画に携わるときには、私たちはこのくらいの設備や人を用意して臨まなくてはいけないというのがよくわかりました」。

最後に貴志氏は、「今は技術的に可能ということ、それ自体が素晴らしい時代というわけでもありません。白黒テレビがカラーになったり、サイレントから音がついてトーキーになったという時代は、それ自体が素晴らしく、その技術の進歩自体がすでに可能性を語っていたのです。だけど今は、先ほども言いましたが、ハイビジョンから4K、4Kから8Kになりました。技術的に可能だから進化してますよ、とは言えないのです。よって、我々の認識をどう広げていくかといったことや、何か説得力がないと、白黒がカラーになったときのインパクトと比べたら比較になりません。ただ風景を撮っただけであれば、それこそYoutubeなどを見たほうが余程インパクトがあります。

今やテレビ以外にも多様なメディアが競い合う時代、4Kや8Kになったらどういう可能性があるかというのを単く意味づけしない限りは説得力がないのです。この技術の進歩には理由付けが必要なのです。この番組を制作しているときは、そのことばかりを頭の中で考えていました。ラジオもテレビが出てきたことで、生き残る秘訣をいろいろ考えて、ラジオでしかできないことをやって、生き残っています。オールドメディアが生き残るのは難しいです。4K・8Kになったら素晴らしい新世界が訪れると単純にはいえないわけです。何の意味があるかを誰かが問わないと、そこで新しいメディアのインパクトは終わってしまうのではないでしょうか。

この番組の制作者としては、これから4K時代を担う若い世代のイマジネーションが広がり、進化していくきっかけになって欲しいと望んでいます。

私はこれからも作り手としては色々な可能性を追求したいと考えていますし、またこういうチャンスがあればぜひともやってみたいという思いがあります」。

(C)電波タイムス社